



図書館の記憶

幼児教育学科 専任講師 酒井真由子

Ueda Women's Junior College Library News Misuzu

図書館の記憶を辿ると、出来事とともにそこにまつわる雰囲気というかイメージが図書館ごとに異なる。年代やその時々で利用の仕方が異なっているためだろう。

高校生の頃、部活を引退して受験勉強一色になってから、友だちと集う場所は図書館だった。放課後の図書館で受験勉強をする、のではなく、図書館司書の方の目を盗みながら、友だちとひそひそ話をするのが楽しくて仕方なかった。その頃、いつも一緒にいた友だちは7人くらい。高校生の私たちにとって、その人数で毎日集える場所は図書館くらいしかなかった。それに、図書館にいれば先生にも親にもうるさいことを言われずにすんだ。そのためか、その時の図書館の記憶は、決まって図書館の古い机で顔を寄せ合う私たちであり、そこは薄暗いのだ(図書館内は明るかったはずなのだ)。

大学生になり、親元離れて一人暮らしが始まると、行動範囲がぐんと広がった。そして友だちと集う場所は、図書館ではなくファミリーレストランや喫茶店になった。そのかわり、図書館へは一人で行った。レポートを書くため、調べ物をするため、卒業研究の文献を探して読むための場所となった。

会社勤めをしているとき、教育学を深く学びたくなり、退職して大学院へ進学した。親と同居することになった私は、一人きりになりたくて図書館へ通った。家から歩いて20分のところに有栖川宮記念公園という、木々が美しい公園があり、その公園内にある図書館が、「教育とは一体何だろうか」と考える場所となった。5階建ての大きな図書館で、あらゆる本がそろっており、おじいさん、学生、主婦などいろいろな人が本を読んでいた。夜9時まで開いているので、7時頃になるとスーツ姿の男性や女性も来て、はなやいだ雰囲気になった。

私は朝からその図書館へ行くことが好きだった。シンと静まり返った図書館に一歩足を踏み入れると、気持ちがシャンとする。大きな書棚から気になる本を数冊持ってきて机の上で開く。私が手にする本はたいてい学校や教育、子どもに関する本だ。たまに、看護や病の本もあった。その多くは難しく、何が書いてあるのかよくわからなかったが、意味は分からなくてもなんだか重要そうだったところに、短冊状に破いた紙切れを挟んでいった(「付箋」といった便利なものなどなかったのだ)。そしてひとつの章を読み終えると、紙切れを挟んだページを再び開いて、重要そうだった部分をノートに写していった。1行ですむ時もあれば、10行の時もある。まだノート型パソコンが高価すぎて今ほど普及していなかった時代である。手書きがあたりまえで、とにかくノートに書き写した。疲れると、公園のベンチに座って缶コーヒーを飲みながら、美しい木々を眺めた。たまにその公園でドラマのロケをしていて、芸能人をこっそり見物した。友人が近所でペットシッターをしていて(ベビーシッターではなく)、犬と散歩中の友人に会うこともあった。

図書館の閉館時間になると、帰途に急ぐ大勢の人たちに混ざり、私も図書館を出る。「あーあ。今日も論文がはかどらなかつたなあ」としょげてしまうのだが、面白い本や重要(そう)な一文に出会ったのだから、と自分に言い聞かせながら帰る。

今考えると、好きだけ図書館にいられたなんて、なんとも贅沢な時間だった。当時のノートがたまに段ボールから出てくることがある。開いて読み返すと、なぜその文章を書き写したのかわからないことが多いのだが、おそらく当時の私は、「重要だ」と思ったのだろう。懐かしく大切な思い出である。

目次

図書館の記憶	幼児教育学科 専任講師 酒井真由子	1
童話という「透き通ったほんとうの食べ物」を前にして	非常勤講師 加々井美恵子	2
読み手視点と作り手視点	非常勤講師 小西あゆみ	3
本の魅力	幼児教育学科 1年 遠藤 智子	4
本とともに	幼児教育学科 2年 黒坂 雪穂	4
生涯の宝物との出会い	総合文化学科 1年 保屋野星南	5
“出会い”の図書館	総合文化学科 2年 藤澤 愛美	5
図書館ガイド		6
上田女子短期大学教員が学生にすすめる本	学長 小池 明	7
	総合文化学科 教授 中西 満義	7
	幼児教育学科 専任講師 長檜 涼子	8

本学教員の最新刊著作

CONTENTS

幼児教育学科 専任講師 酒井真由子	1
非常勤講師 加々井美恵子	2
非常勤講師 小西あゆみ	3
幼児教育学科 1年 遠藤 智子	4
幼児教育学科 2年 黒坂 雪穂	4
総合文化学科 1年 保屋野星南	5
総合文化学科 2年 藤澤 愛美	5
	6
学長 小池 明	7
総合文化学科 教授 中西 満義	7
幼児教育学科 専任講師 長檜 涼子	8
	8

童話という「透き通ったほんとうの食べ物」 を前にして

本学 非常勤講師 加々井美恵子

この4月から初めて前期「児童文学の世界」、後期「児童文学を書く」という講座の講義を受け持つことになりました。

学生たちには、まず好奇心を持ってこの講座に臨んでもらいたいという想いから、「児童文学の扉をノックする」という副タイトルを掲げてみました。扉の向こうの豊かな世界に一步でも足を踏み入れてほしいと思っていたのです。

講義は児童文学史を辿って進めていきましたが、初版に忠実な翻訳の昔話や古典に「こんな話だったのか」と新鮮に驚く学生の声がありました。もう一度読んでみたいという感想には嬉しさを感じました。また、講義の後にさっそく図書館に行き本を探す学生の姿を見ることができました。

読書離れという現象の中で育ってきた学生たちです。私が取り上げた児童書を読んでない場合ももちろんありましたが、今からでも決して遅くはありません。作品の中に子どもの頃の自分を再発見して、心のわだかまりが消えることだってあるのです。

また、児童書は読みやすいのが利点なので、短時間で気軽に手に取れます。そしてそこに書かれている世界観は普遍的なものが多く、国や時代も様々で次元さえも超えた物語を体験できる魅力があります。学生たちにもふさわしいヤングアダルト文学作品も現代は充実した品揃えになっているのでお勧めです。

さて、童話は子どもたちの感情を豊かに育てるものですが、それは子どもだけのものではありません。宮沢賢治の作品はむしろ大人に好んで読まれています。童話集『注文の多い料理店』序文に書かれた言葉に「わたくしは、これらのちひさなものがたりの幾いくきれかが、おしまひ、あなたのすきとおったほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません」とあります(宮沢賢治の童話や詩には「すきとおった」とか「透明な」という表現が頻繁に使われています)。「透き通ったほんとうの食べ物」を求める賢治は、自分が生きているこの世界の本质を常に見ようとしていたと思うし、光や風のように濁りのない真実を自然や宇宙の中に見出していたのではないのでしょうか。この「食べ物」がただ単に純粋な物というわけではなく、生きる力となるエネルギーを秘めたものであるからこそ自

分の中に取り入れ消化してほしいと願っているのだと思います。童話というものを考える時、賢治のこの想いは、なんと魅力に溢れていることでしょうか。そして子どもたちには是非とも「透き通ったほんとうの食べ物」を食してほしいと思えてくるのです。

賢治の生きた時代と比べると子どもたちを取り巻く現代社会は複雑で厳しいものがあります。文学はその子どもたちの心に寄り添っていかねばなりません。創作の現場は生易しいものではありませんが、私には胸躍るものでもあります。

それが冒険小説やナンセンス童話でも表現手段はいずれでも「透き通ったほんとうの食べ物」にすることは可能なはずだと、私は創作者のひとりとして自分に問いかけています。

さて、大風呂敷を広げてしまった感はありますが、児童文学を書いてみたいという学生と一緒に後期は共に悩み、模索しながら創作していこうと思います。書き手としての初めの一步を踏み出すお手伝いができればと考えています。

■ 加々井美恵子先生の著書

- ・「キンピカコンとスッカラコンのホーリーナイト」
(共著「みんなおいだよ おはなしひろば」理論社刊より 1996年)
- ・「ピッカリコようちえんと ドングリ林の12か月」
(単行本 オフィスエム刊 初版2003年、改訂版2011年)
- ・「繭子とふしぎな奥座敷」
(単行本 goodbook刊 2007年)
- ・「とべ！パタタン」
(絵本 goodbook刊 2007年)
- ・「ピアノの森で」
(共著「ピアノの森で 花園屋敷の魔法使い」goodbook刊 2009年)
- ・「ガーリック博士のおみやげ話」
(単行本 goodbook刊 2010年)
- ・「パタタンと子ヒツジのウルン」
(絵本 goodbook刊 2014年)
- ・「赤松は忘れない ～語り継ぐ戦争絵本シリーズ22」
(絵本 郷土出版 2015年11月刊行予定)

読み手視点と作り手視点

本学 非常勤講師 小西あゆみ

イラストレーター・漫画家・講師、私を紹介するときにつく肩書はこのようなものです。どれも本を作る立場に縁が深いもので、自分自身の単行本だけでなく、他人の文章の挿絵や名前が出ないお手伝いという形で関わる機会も多くあります。

そんな生活を続けてきたので、気がつけば「本」という存在を「読むもの」ではなく「作るもの」として見てしまうのは、ちょっとした職業病なのかもしれません。単行本にできるだけ量を執筆するのにどれだけの労力と時間がかかったのだろうということはもちろん、それ以外にも本に使ってある紙の質や印刷方法をじっくり観察したり、雑誌で連載されていた作品であれば公開されてから単行本になるまでの期間から作家さんのスケジュールを割り出したり…。人様の裏側を覗いているようで少々悪趣味にも聞こえてしまいがちですが、想像もつかないようなスピードで高いクオリティの作品を生み出している作家さんも多く、自分の仕事を見返して「見習わなければ」と気持ちを改めることもしばしばです。

一方、授業では「読者を意識した作品づくり」をテーマに、既存の物語に挿絵をつけるという形でイラストレーション制作を行っております。認められたい、共感してほしい、自分の作ったすごいものを知ってほしい…中身は様々ですが、何かを作りたいという衝動の中には「人に見てほしい」という気持ちがいくらか入っている人がほとんどだと思います。しかし衝動だけで描いたものは技術や表現力が追いつかず、伝わりにくい作品になりがちです。

ならば「どう描いたらたくさんの人に見てもらえるか」を考えるとところから始めてみよう…というのが今回の授業です。どういう人に見て欲しいか、見て欲しいと思う人たちはどういうものなら見たいと思ってくれるか、見たいと思われる作品を作るために何を必要とする必要があるか…というように、目的と手段をリンクさせて考えて描くことを目標としています。

人に見てほしいなら、見てもらうためにできること・すべきことを考える。文字にするとあたりまえのことに見えますが、仕事として絵を描いている今でも、気

が付くとふっと頭のなかから抜けていることがあるので、忘れないように気をつけています。

本を読むときは作り手のことを考えて、作品を作るときは読み手のことを考える…やはり職業病なのでしょう。たまには純粹に読者として本を楽しみたいなどしみじみ思います。

■ 小西あゆみ(宙花こより)先生の著書

- ・「マンガでわかる！片付け+収納術(2013年)」
(学研パブリッシング 2013年)
- ・「マンガでわかる！収納+整理術」
(学研パブリッシング 2014年)



小西あゆみ(宙花こより)先生の作品

本の魅力

幼児教育学科1年 遠藤 智子

私は幼い頃から本が大好きです。物語に出てくる、美しいお姫様や素敵王子様、言葉を話す動物たち、キラキラと輝く宝の山は夢を与え、見たことのない未知の世界を教えてください。そんな物語が図書館にはたくさんあります。また、夢を与える物語だけではなく、生き方を教えてくれるもの、その時代の問題を訴えてくるもの、知識を与えてくれるもの…と様々なものがあり、その全ての本には書いた人の思いが込められています。そしてどの本も読者に何かを伝えようと訴えていると思います。

いままで様々な本を読んできましたが、その中でも幼い頃に読んだ絵本『スイミー』がいまでも大好きです。国語の教科書にも載録されているため、誰もが一度は読んだことのある絵本ではないでしょうか。幼い頃は『スイミー』という物語の内容よりも透明感のある淡い絵がお気に入りだったのだと思います。しかし、現在読み返してみると絵よりも、自分だけが真っ黒で、赤い魚の仲間たちとは違うスイミーがその違いを前向きに捉え、仲間の赤い魚たちを先導するという物語の内容に魅力を感じました。

本は読む年齢やその時の精神状態によって見方が変

化し、読み返すたびに一冊の本から新たな発見ができると思います。またそれは、絵本でも小説でも伝記でも全ての本に言えることなのだと思います。一度読んだ本でも次に読んだときには違った見方ができる。そこが本の一番の魅力なのではないでしょうか。

そして、図書館は本を書いた人の思いやその本を読んだ人の思いなど、様々な思いが交わり合う場所だと思います。また、本を通して人と人が時を超えて、国を超えて、自由に交流できる素敵な空間だと思います。

私は、これからも図書館で多くの本を借りて読んでいきたいと思っています。なぜならば、図書館には私の一生を賭けても得ることのできない多くの知恵や経験、夢があるからです。それらの事を本から学ぶことで、広い視野を持てるようになりたいからです。広い視野を持つことで、将来、保育者として子どもたちにより良い未来へのサポートができると信じています。

本とともに

幼児教育学科2年 黒坂 雪穂

私にとって本は、新しい知識、新しい世界、新しい考え方を与えてくれるものです。私は本が与えてくれるものに何度も助けられてきました。

小学生のころ、私は交友関係が上手く築けず孤立していました。そんな私の唯一の安息所が図書館でした。幼かった私は、本が与えてくれる面白くて、不思議で、ワクワクする世界に没頭することで寂しさを忘れることができました。

中学生になっても私は図書館に通いつめ本に没頭していました。しかし小学生のころと違ったことがありました。それは本を、自分が楽しむだけでなく、交友関係を広げるために利用できていたこと、自分の将来の夢のために必要な知識を集めるために利用したこと、です。本が好きという共通点を持っている人と本の内容について語り合ったりすることはとても楽しいことでした。また、知らなかったこと、分からなかったことを本を通じて調べることで知ることを楽しむことができました。

高校生、短大生になりレポートを書く機会が増え、今度は評論を読み始めました。自分の考え方の他にどのような考え方があるのか、いろいろな考え方を取り入れることで自分の世界が広がったように感じました。

今思い返してみると、私は本当に本に助けられていたのだな、としみじみ思いますし、本なくして今の私はいないと断言できます。

本は、今までの私の人生の大半を占めるものです。そしてこれからも本とともに歩み続けていくのだと思います。



生涯の宝物との出会い

総合文化学科1年 保屋野星南

若者の活字離れが叫ばれている現在、皆さんの身近に本の存在はあるだろうか。思い返せばまだ年少組と言われる年齢のころから、私の隣には常に本があったように思う。

私の一番古い本の記憶は、近所のスーパーの雑誌コーナーで小さなラックに並んでいた、子供向けの童話集だ。幼かった私はそこに買い物に行く度に、必ず一冊、親にねだってはむさぼるように読んでいた。挿絵つきの易しい本だったのですぐに読み終え、少し物足りない気もしたが、その本のために買い物に行くのがとても楽しみだったことを覚えている。

私の乱読癖は学校に通うようになっても相変わらずで、暇さえあれば図書館に行き、授業の合間の五分に本を読みだしたら授業が始まっても気が付かず、我に返るまでその日の食事を全くとらなくても平気なほどだった。下校時も本を読みながら歩き、怒られたことを思い出すと今でも苦笑がもれる。だが三度の飯より本が好きと豪語できる私でも、長年「この本が一番!」と言えるような本には出会うことがなかった。やっとその本に巡り合えたのは、私がすでに高校生最後の年のことだった。

それは、中学の図書館で見かけたことはあったが、読もうとは思ったことがなかった本だった。そんな本を何故私が手に取ったのか、それはひとえにその表紙のイラストのデザインに惹かれたからである。図書館に置かれていたものはハードカバーで、それが文庫本になって並んでいる背表紙を書店で見たとき、何気なくそれを本棚から抜き出した。そして表紙を見た私は、その時点でその本の虜になっていたのかもしれない。とにかくそれだけで一つの美術品になりそうなほど、美しかった。こう書いているとその本の絵だけが好きなのではないかと言われそうだが、その内容の緻密さ、シナリオの構成の巧みさ、伏線の巧妙さ、そういったものをつらつらと並べて語れるくらい、今の私はその本自体が大好きだと自信を持って言える。

ここまでで私が何を言いたいのかというと、素晴らしいものとの出会いは思いがけないきっかけでやってくるということである。たとえ活字離れで本が好きではなくとも、なにか別のものから本の世界に没頭することがあるかもしれない。全く関係なくても、自分の好きなものから本の世界へと入ってきてくれれば、とても嬉しいと思う。

“出会い”の図書館

総合文化学科2年 藤澤 愛美

図書館というのは、“出会い”の場だと思います。もちろんひとつは本です。私が本好きとなるきっかけも、小学生時代の図書館での出会いでした。当時の私は、さほど本に興味を持つ子どもではなかったのですが、1冊の本との出会いをきっかけに、180度がらりと変わってしまいました。その本のタイトルは覚えていませんが、内容は大きなおすのつぼ?に猫と暮らす1人のおばあさんと、おばあさんに助けられた魚の王様のお話でした。何気なく手にした本でしたが、あっという間に惹きこまれてしまうおもしろさでした。その時、私は本から物心というものを、もらったのではないかと考えています。特に思春期における本との出会いは、その人の後の人生を決定づけてしまうと思うほどは、しみじみと実感しています。図書館に行って、じっくり本棚を眺めて、この本おもしろそうだな、とか、こんな本があるのか、など、出会いと発見が図書館には詰まっていると思います。

図書館での出会いとして、もうひとつは人との出会

いです。本を通して、図書館を通して、つながれる縁があると思います。それは、利用者同士だけでなく、図書館の先生など図書館員とでも同じことが言えます。そこからどんどん縁を広げられることは、図書館の特長のひとつだと思います。私が図書館司書を目指すきっかけも、高校時代の図書館と図書館の先生との出会いからでした。こんな本がある、この本のここが好きだ、など他愛ない事を語れる図書館は、貴重な息抜きの場でした。

また、図書館は自分だけの速さで時間が流れることを許してくれる、大きな懐のような場所だと思います。鎌倉市図書館が夏休み明けの学生に向けたツイッターなどのように、図書館は一種の避難所としても求められています。

今、私は図書館司書資格の取得を目指しています。人と本、人と人を結びつけるような機会があった際には、そこで学んだことを生かせるよう、より一層力を入れていきたいと思っています。

図書館ガイド

第17回図書館総合展 (11月10~12日 於パシフィコ横浜)

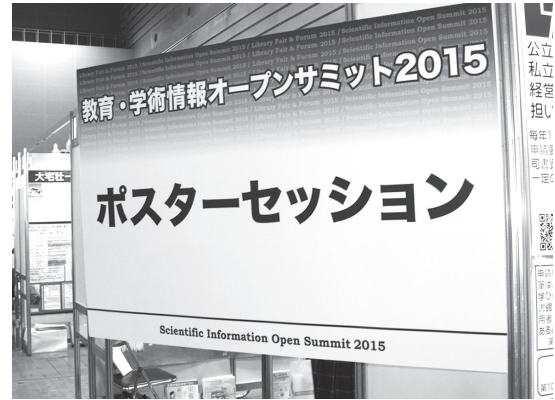
ポスターセッションに参加しました。 エントリーNo.43 上田女子短期大学

*参加ポスター66点の中にあって簡易ガイドのためのチラシも配布しました。

ポスターに掲載の校内の紅葉の様子を再現するために色付いた木の枝や葉っぱを使ってディスプレイしました。配布した「どんぐりの実で作った顔」は大好評でした。



パシフィコ横浜 図書館総合展の案内看板



会場内「ポスターセッション」のコーナー



本学のポスター

上田女子短期大学の図書館力 Version2 図書館サークルFLC：学生と共創する図書館



私たちは Future Librarians Club (未来の図書館員のためのクラブ)、略してFLCです。図書館司書を目指す、本が好きな学生のサークルです。附属図書館の利用促進、読書の推進を目標として、2010年にスタートしました。附属図書館のお手伝い、ニュースレターの発行、おはなし会のほかTwitter、ブログでの情報発信をしています。

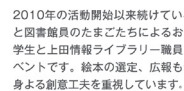
活動の紹介

図書館員と図書館員のたまごたちによるおはなし会
上田情報ライブラリーで子どもたちに読み聞かせをして、絵本をいっしょに選びます。(毎月第3日曜日)



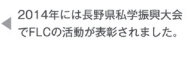
絵本を題材にしたお菓子作りの練習です。学園祭で展示します。

上田市立丸子図書館まつり
ぬいぐるみのおとまり会
読み聞かせ(毎年10月)



2010年の活動開始以来続けている「図書館員と図書館員のたまごたちによるおはなし会」は学生と上田情報ライブラリー職員による協働イベントです。絵本の選定、広報も含め、学生自身による創意工夫を重視しています。

図書館バスツアー
長野県内の図書館をバスで巡ります。(毎年9月)



学海祭(学園祭)
附属図書館のお手伝い
書架整備、七夕の飾り付け
Twitter アカウント
<https://twitter.com/FLCkouhou>
ブログ
<http://flickkouhou.blog.fc2.com>



所在地・連絡先
〒386-1214 長野県上田市下之郷2-620
上田女子短期大学 総合文化学科
本内公一館(サークル顧問)
E:malikina@uedawjic.ac.jp

上田市立丸子図書館「ぬいぐるみのおとまり会」の様子です。職員さんと学生が協働して、成功させました。

2014年には長野県私学振興大会でFLCの活動が表彰されました。



会場の様子。過去最高の入場者34,000人を記録しました。

学生のサークルFLCの附属図書館や地域の図書館での活動を紹介しています。

上田女子短期大学教員が学生にすすめる本

Vol.
1

学長 小池 明

My Recommended Books



① 私の読書の中から

『ポーツマスの旗』

吉村昭著、新潮社、1979年刊、文庫版もあり(1983年刊)

『いっさい夢にごさ候 ― 本間雅晴中将伝』

角田房子著、中央公論社、1978年刊、文庫版もあり(1989年刊、2015年改版)

前者は日露戦争後の和平交渉に当たった当時の全権大使小村壽太郎に就いて、後者は第二次大戦中陸軍きつての英米通と言われ乍ら戦犯として処刑された本間雅晴中将に就いての伝記である。それぞれ当時の世界情勢下、母国と国民のために体を張って努力するが個人としての生涯は必ずしも報われたとは言えず、まさに後世の歴史が評価をした人物だ。交渉相手や敵軍の評価・敬意が足許の家族や自国民の評価と一致するのかどうか、国家間の相克の中で個人が如何に翻弄されて生きざるを得ぬものか、与えられた使命を果たしながら個人としてどう生きるべきかなど、読後の余韻とともに考えさせられる本である。私が曾て為替相場のディーラーをしていた時に相場が読みと逆に動き、損切りを迫られた場面で小村の心境を追体験した。勿論、国家の存亡がかかっている局面とは次元が違うとは言い条、自分の相場観に抱く確信と組織の論理、ルールとの調整に大いに悩んだ時に示唆を与えてもらった。いずれも文庫版もあり、学生諸君にも是非読んでもらいたい本である。

加えて、私は併行して10冊程度の本を読むのが癖であるが、その中にはミステリーを必ず一冊入れておく。皆さんには法廷物、特に米国の法廷物ミステリーを読まれることもお勧めしたい。

② これは読んでおこうー研究者の立場からー

『大学教育について』

ジョン・ステュアート・ミル著 岩波文庫

現在、高等教育、大学や短大にとって、社会の要請、寧ろ圧力と言うべきか、特に人文社会科学分野に対する逆風が強い。直ぐに結果を求める軽佻浮薄の風潮に大なる懸念を禁じ得ない。同書は岩波文庫版で解説や注を入れて177頁、昔なら星2つといった薄い本で、特にミルの講演である本文だけなら130頁弱のものであるが、大学の教育の本質、在るべき姿に就いて述べている。1867年の講演録だが、時代を超えてなお、読むべき価値があり、今もその本質は変わらないと私は思う。決してノスタルジックな思いに留まるものではない。教職員、学生の皆さん共に前半だけでも一読して欲しい書である。

『私が大学について知っている二、三の事柄』

蓮實重彦著 東京大学出版会2001年刊

著者は元東京大学総長。仏文学者としての業績もさること乍ら、国公立大学の独立法人化に際して巨大組織である東大をどのように移行させ、片や国際化への対応も海外の大学との連携に大いに手腕を発揮した。本書は変革の時期に如何に見事に行政手腕を発揮したかの自慢話ではない。著者は教育者・研究者として大学の在る可き姿、特に日本社会が沈潜している時期に「改革」のかけ声が政官財界から大学にも圧力として降りそそいだ時に、改革が最終目的化する弊害、換言すれば改革の為の改革に墮すのではなく真の目的を見据え、地に足のついた改革のought to beを敢然と唱えた人である。本書はそのような話題だけでは無く、個人としては映画評論にも警咳を持つそのような趣味や人柄が大学人としての生き方、研究姿勢態度にも深みを与えていることが伝わってくる書物である。



総合文化学科 教授 中西 満義

My Recommended Books



① 私の読書の中から

『畜生道の地球』

桐生悠々(中公文庫)

近時、郷里の先人たちに心を寄せることが多くなりました。「四高の三太郎」と言われた西田幾多郎、鈴木大拙(貞太郎)、藤岡作太郎をはじめとして、藤岡に同じく西行研究の先達尾山篤二郎、などなど。信濃毎日新聞の主筆も務めた反骨のジャーナリスト、標記桐生悠々もその一人です。

② これは読んでおこうー研究者の立場からー

『中世の文学』『無用者の系譜』『無常』

唐木順三(筑摩書房)

純粋な研究書とは言い難い文芸評論ですが、中世に惹かれる契機となった書籍です。思索のみちすじが文章となっている、稀有な著述です。ちなみに、唐木氏は上伊那宮田村の出身の文芸評論家、思索家です。

③ 私の著書、論文の中から

是非にと勧めものではありませんが、日本文学の専門誌『国文学 解釈と鑑賞』に九本の文章を載せています。十本に達したら一書にまとめようと考えていたのですが、十本目は幻のまま、雑誌終刊を迎えました。中世文学、中世和歌、菅原道真、西行、佐渡など、さまざまな特集で書かせていただいておりますので、時間があれば書庫で探してみてください。





幼児教育学科 専任講師 長檜 涼子

My Recommended Books



① 私の読書の中から

『はてしない物語』

ミヒヤエル・エンデ(岩波書店)

茜色の表紙にアウリンが模られ、二色刷りの文章で物語が展開される。読む者は皆、バスチアンと共にファンタージェンへと導かれアトレユと共に冒険するだろう。

② これは読んでおこうー研究者の立場からー

『いまを生きるあなたへ贈る詩50』

二瓶弘行(東洋館出版社)

研究者には、誰もが当たり前と思うことから何かを拾い上げ

る豊かな感性が求められる。詩に込められた一人ひとりの感性に出会う時、私の心が豊かになれる。

③ 私の著書、論文の中から

『新時代の保育叢書 子どもの理解と保育・教育相談』

(小田豊・秋田喜代美編)みらい

担当箇所：第5章「保育場面でのカウンセリング技術の活用」pp72-85

共著だが、実践的にカウンセリングの技術を紹介した。

2015年 本学教員の最新刊著作

(今年発行の単独書・共著・分担執筆) 著者の五十音順

* 酒井真由子先生

『保育士採用試験重要ポイント+問題集 '17年版』

成美堂 2015年11月発行(共著)

『いちばんわかりやすい保育士合格テキスト(上)'16年版』

成美堂 2015年11月発行(共著)

『保育士入門テキスト'16年版』

成美堂 2015年11月発行(共著)

* 市東 賢二先生

『保育相談支援の基本と留意点』

坂本健編著 大学図書出版 2015年4月発行(分担執筆)

* 島崎あかね先生

『<ねらい>と<内容>から学ぶ保育内容・領域 健康』

清水将之・相楽真樹子・岩崎桂子・島崎あかね・市川舞・松原敬子編著
わかば社 2015年9月発行 ISBN 9784907270148 (分担執筆)

* 西山 秀人先生

『平安大事典：ビジュアルワイド：図解でわかる「源氏物語」の世界』

倉田実編 朝日新聞出版 2015年4月発行 ISBN 9784023313934 (分担執筆)

みすず

第42号

上田女子短期大学附属図書館報
2015.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館・紀要委員会
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel：0268-38-6019 Fax：0268-38-6019
E-mail：lib@uedawjc.ac.jp

編集後記

a postscript by the editor

図書館からの発信 2015

実りの秋にふさわしい話題が3点あります。

①国立国会図書館が展開する「図書館向けデジタル化資料送信サービス」がうけられるようになりました。本学附属図書館の端末で、古典籍をはじめ、調査・研究に必要な資料が閲覧できます。

②第17回図書館総合展のポスターセッションに参加しました(6頁)。昨年に続いて2回目のエントリーです。

③第65回長野県図書館大会に参加しました。基調講演(前国立国会図書館長・長尾真氏)は、本学小池明学長の肝煎りで実現しました。

来年も、話題を揃えたいものです。

大橋敦夫